

禅の友

Zen no Tomo

8

August 2020

特集 お盆





ご本山だより

大本山永平寺【蓮と墨染めの川】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



肌にまとわりつく熱気の中、黒色の作務衣の雲水が、廊下を何度も往復しています。回廊清掃で雑巾がけしている永平寺の朝の光景です。

早いもので雪が残る山門に立っていた春上山の新倒和尚さんたちも永平寺にきて半年。首座和尚さんに励まされ、三カ月間の厳しい制中を乗り越えた姿は、僧侶として逞しく成長しています。何をすればよいのかわからなかった上山当時とは違い、きびきびと決められた作法で動く姿に頼もしさを感じます。朝日が昇る前から動き出し、僧堂での坐禅・法堂でのおつとめ、そしてまた僧堂での飯台、最後に回廊清掃。一連の流れが終わるころにはすっかりと日は高く、今日も暑いことを予感させます。

仏殿前の中庭では蓮が見事に咲いています。蓮の花は泥の中から茎を

まっすぐにのびし水面をはるかに超え、時が来ると、パツと花開くのです。咲いた瞬間、実をつけていることから、修行とさとりが同時にあるということにたとえられています。

永平寺での生活は年間を通してほぼ変わりません。繰り返される日常は「何でこんなことをしているのだろう？」と問いかけてきます。同時に、突き付けられる公務の忙しさは時の流れは止められないことを、身体に教えてくれます。変わらないように思えても、季節の変化、立場の変化があり、その度に自分の生き方と向き合わせてくれます。

悩み、苦しみながらも足を止めない雲水の汗が光ります。

この夏も仏さまの眼前には、蓮の花と墨染めの川が流れています。



ご本山だより 大本山總持寺

【真夏の修行】 映りたるつゝじに緋鯉現れし 虚子

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



總持寺では七月がお盆の月にて、旧盆に当たる八月はほとんどの修行僧が師寮寺（師匠のお寺）補佐で他出（帰省）し、文字どおり伽藍堂となります。

特に、今春上山した一年目の修行僧にとっては初めての他出であり、たくましく成長した姿をお師匠さまやご寺族、檀信徒の方々に見ていただく善い機会でもあります。

旧盆の行持が終わり、修行僧がそれぞれの他出から戻ってくると、總持寺は再び活気に溢れます。

曆の上では七日が立秋ですが、まだまだ草がよく生える時節です。總持寺では除草剤を使わず、ひたすら草むしり作務に精を出します。

作務は大事な修行の一つであります。落ち葉の掃き作務や廊下の雑巾が

けなど、広大な境内を清浄に保つには、毎日の作務を欠かすことが出来ません。

勿論、新型コロナウイルスの感染が懸念されますので、作務の際も互いに距離を取って行い、熱中症に罹らないよう注意いたします。

暑い中で汗を流しながらの作務の後、先輩僧も後輩僧も一緒にお茶を頂戴しますが、その味わいは何とも言えない格別なものがあります。

さて、五院の普蔵院開基太源宗真禅師六百五十回御遠忌の記念事業として、紫雲臺の庭の保存整備工事が行われました。整備改修された池には色鮮やかな錦鯉が沢山放たれ、悠々と泳ぐ姿は紫雲庭に一段の彩を添えています。

選・坊城俊樹

菜の花に夕日溶けゆく外房線

神奈川県 小野沢 邦彦

評 外房線は房総半島の海よりのところを行く路線。菜の花畑の中を走ることもあるのだろう。ちよど夕刻となる時間には、黄色とも朱色とも言える日差しがあたかも花に溶けて行くような牧歌的な風景となる。絵画的な句とも言える。

霾や庭の錆びたる鉄亜鈴

長野県 森山 昌子

評 「霾」は「つちふる」、黄砂のことである。庭に放置されている「鉄アレイ」もまたその時期には赤錆びてホコリにまみれている。同時にそんな季節は庭そのものも錆びてしまっているような錯覚に陥るのである。

◆ 春の灯やドボルザークの宙満たす

神奈川県 住友利行

◆ 大の字の足裏さわる若葉風

千葉県 須見祥子

◆ キャンデー屋来て中断の草野球

秋田県 小田篤恭葉

◆ うららかや樂觀主義は父ゆづり

岐阜県 大下雅子

◆ 昨日より今日は眠たし春深し

静岡県 五條春男

◆ 空の藍湖の藍たけなはの春

大分県 久垣大輔

◆ 松の芯こやしやく一尺もあり突つ立ちぬ

神奈川県 池亀恵子

◆ 本尊の丸き手のひら夏隣

青森県 中田瑞穂

◆ 彼の岸へ寄せて届けて花の波

千葉県 山上陽子

◆ 捨鉢に野辺の花咲く暮れの春

神奈川県 小橋 幸

選者吟

蕉翁の像は恐らく春裕あわせ

俊樹

作句小見 東京の深川には松尾芭蕉の記念館がある。その一角には芭蕉の像がゆったりと座って、隅田川のほうを眺めている。それは銅かなにかの金属製ののだが、見ていると春裕のように見えてきた。奥の細道に旅立つために。

選・長澤 ちづ

亡き父にひとりで暮らす母のこと送信したい春風にのせ

岩手県 熊谷 美智子

評 高齢ながらひとりの暮らしのまだ出来る母の健やかさにほっとしつつ、その思いを亡き父と共有したいと詠う作者。そう思わせたいのは春風の存在ではないか。テーマは春のような気がする。そのさり気なさが歌意をひきたてる。

薄明を破る小鳥の鳴き声を聞きつつ信濃の夜明けを待てり

埼玉県 新井 巳喜雄

評 ある種の緊張感が支配する一首である。単なる物見遊山の旅ではなさそう。二音節の小刻みな語の反復や、K音の韻律が功を奏している。

◆ 東稲山は涅槃像似と教わりぬ西行祭の月見坂にて

岩手県 千葉 喜恵

◆ ああこれはステンダグラス朝光を受くる若葉を裏より見れば

福岡県 三吉 誠

◆ 父母植えて七十年経し大杉を仰ぎ抱きしめ温めてをり

三重県 西村 廣視

◆ 路を往くマスク、マスクの連なりに院内廊下を歩むが如し

鳥取県 山本 浩一

◆ 裏道は無けれど寄り道回り道たくさんしたよと亀は陽を浴ぶ

島根県 横山 稔吾

◆ 花木の名友の名さえも失せてゆく耳目澄まして生きてゆかねば

秋田県 小松 紀子

◆ 明けの夢のなかなる故郷の人らみな優しき笑顔で迎えてくれにき

兵庫県 前田 あつ子

◆ 消しゴムは減って存在感示す身を削るのみ俺の人生

奈良県 鈴木 重雄

◆ 百歳の姉に足元注意され疲れうれしい山蔵とり

福島県 西木 甚

◆ 愛し子と託して逝きぬ君のウド夏待つごとく太き芽を出す

福島県 佐藤 忠

選者詠

自肅の日々われから顔を消しにけり顔は

人との符号なるべし

ちづ

作歌小見 若葉の美しさを朝光を通して詠う三吉さん、亀に託して

人生の機微を詠うかの横山さん、自虐的に自己を見つめる鈴木さん

と、投稿歌は多岐にわたり、皆さまの思いの深さを受け止めること

が出来ます。